

18号 全面特集 やどかりの里の人々の思いを聞く

やどかりの里状態調査

真の協働を形づくるために

やどかりの里はどう生きようとしているのか

2つの状態調査の取り組みを通して

増田 一世（やどかりの里状態調査調査団，やどかり情報館）

I・やどかりの里における2つの状態調査

やどかりの里は、設立30周年の節目を迎えるにあたり、1999（平成11）年、2000（平成12年）と2年にわたって2つの状態調査に取り組んだ。調査結果にもとづき、やどかりの里の活動を振り返り、これからの方向性を5つの課題として導き出した。

ここでは、精神保健福祉の分野では耳慣れない「状態調査」がやどかりの里にとってどのような調査であったのか、その調査の過程で出てきたこと、そして、その調査から導き出された課題、その課題に今私たちがどのように取り組んでいこうとしているのか、その時々に関わった人たちの思いにも触れながら報告していきたい。

またこの報告は、調査団を代表しての報告ではなく、2つの調査やその後のさまざまな取り組みに関わる1人としての報告であることをお断りしておきたい。

私は、1978（昭和53）年にソーシャルワーカーを目指し、やどかりの里の研修生となった。やどかりの里には当時研修生の制度があった。福祉系の大学を卒業後、ソーシャルワーカーを目指すために実践研修を行う制度である。その後、やどかりの里では卒後研修はさまざまな変遷を経て、廃止になった。研修生だった1年間は賃金はなく、アルバイトで生活費を稼ぎながら、やどかりの里に関わっていた。そして、翌年からやどかりの里の職員となった。私は、ソーシャルワーカーとして精神障害者のグループ活動を担当しながら、出版活動（やどかり出版）に従事し、自らの人件費を稼ぎ出すことを要請されていた。